

を

ー

みじかいよこせん

↓
く

とんがりおはな

↓
を

しぼったれもん

図1 「を」を書くときの言語指示の例

コツ3 うまく書けたら、その場で一緒に喜ぶ
うまくできない子ほど、自己流でやりたがるため、手を添えられることを嫌がる傾向が強いようです。できるだけ小さいうちに「手を添えてもらって書くと、うまく書ける」という経験を積み、支援を受け入れる態度を養いたいものです。そのためには、一文字書けたら子どもと一緒に

うになります。
⑤筆運びが早い子には、「徐行運転だよ」「坂道を下るときのようにブレーキをかけながら」などといった丁寧な動きづくりを支援する言語指示を行い、手を添えます。同様に、線分の長さや角度、曲がり具合などについても、耳からの情報を添えながら指導を行うと書きやすくなります(図1、小野村哲著『ひらがなれんしゅうちょう』(いばらきマナビイ・ネット、二〇〇六)を一部改変して使用)。

④正面から関わるのは、どこに注目して見ればよいのか、目の使い方も同時に教えてあげられるからです。たとえば、線の終点から次の線の始点までの移動の途中は目が離れやすくなるため、目が逸れたらそこでいったん動きを止め、再度集中を促してあげると丁寧に書けるようになります。
③線分の始点・終点・曲がるポイント・交差するポイントなどは、とくに意識しやすくなるよう、痛くない程度に強めの圧をかけてあげます。その際に一秒程度、手の動きを止めてあげます(写真3)。
④正面から関わるのは、どこに注目して見ればよいのか、目の使い方も同時に教えてあげられるからです。たとえば、線の終点から次の線の始点までの移動の途中は目が離れやすくなるため、目が逸れたらそこでいったん動きを止め、再度集中を促してあげると丁寧に書けるようになります。

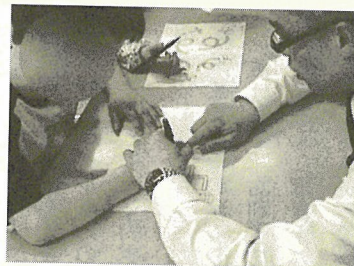


写真1



写真2



写真3